

適性検査 I

注 意

- 1 問題は **1** だけで、**3** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は **四十五分**で、終わりは **午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙にはっきりと記入し、**解答用紙だけを提出**しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立武蔵高等学校附属中学校

1 次の二つの文章Aと文章Bを読んで、あとの問題に答えなさい。

(*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。)

(文章A)

『マイ・フェア・レディ』という、公開されてもうずいぶんになるのに、今でもとても人気のあるオードリー・ヘップバーンの映画があります。映画は、とても元気がいいけれども、貧しい語彙と粗野な言いまわしと不調法な話し方しか知らない若い女性が、苦心惨憺のあげくに、みずから言葉をゆたかにしてゆくようになるまでを、巧みに描きます。その映画の急所は、言葉のもち方が、一人の間を、人格をつくるのだという事です。

言葉というのは、*どのつまりその人の生き方の流儀であり、マナーです。言葉をゆたかにするというのは、自分の言葉をちゃんともつことができるようになることです。自分のでない言葉に、流行の言葉や借用の言葉に、*けっして自分を預けてしまわない。どんなにおカネをもつていても、おカネで買えないものが、言葉です。人間の持ち物のなかでも、言葉だけは、赤ん坊が言葉を覚えてゆくときのように、ただただ学ぶのでなければ手に入らないのです。

勉強しなければならぬというわけではありません。言葉というものでこんなにも自分をゆたかにしてゆけるのだという、そのことは自分で覚えるしかない。そういう意味では、*学ぶというより、覚えるといったほうがいいかもしれません。それだけは自分で覚えなければ覚えられないのです。

言葉なんか毎日、好きなように、好きなだけ使っている。全然、不自由していない。わたしたちは、*そう思おうとしています。言葉に、平等はない。みなおなじです。語彙もおなじなら、*抑揚もおなじ、語調もおなじです。さらに携帯電話などの新たなコミュニケーション機器が

でてきて、喋れば、あるいは喋るだけで、自分なんかいつでも、どうにも表せるようになった。今はそんなふうに感じられています。

しかしそのように思おうとしながら、本当はそうではないのではないかと不安があります。というのも、自分を表す言葉に不自由しないと感じているために、*どういう言葉が自分に必要なかということ、だれも考えなくなった。自分が*どういう言葉を、どんなふうに使って、*どういうことを話しているのかなどと*考えないところに、自分を置いて話すことが当然のようになってきているためです。けれども、ふと見まわすと、どこにも自分という存在がなくなっています。

これからは、どんな言葉をどれだけきちんと使っているか、あるいはどれだけきちんと使えないでいるかが、それぞれを違えらるとても大事な*ものになってゆくだろうと思います。全体が自分たちを包んでしまっている。そのことに*気づかないでいると、*気づいたときには貧しくなっているかもしれない。貧しくなっているかもしれないのは、言葉を貧しくしかもたない人間になってしまっているかもしれない、ということ*です。

(長田 弘「読書からはじまる」による)

〔注〕 語彙 — 言葉の種類。

粗野 — 品のない様子。

不調法 — 気がきかず、行きとどかないこと。

苦心惨憺 — ひじょうに苦勞すること。

急所 — 物事の大事などところ。

抑揚 — どのつまり — 結局。

抑揚 — 言葉などの調子を上げたり下げたりすること。

(文章B)

言葉を沢山知っていきえすれば、言葉の暮しが豊かになるというものではありませんが、特定の言葉を、見境もなく使い続けるというものもどうかと思います。

「今朝、何食べて来たの？」

「トーストとかあ、紅茶とかあ、そうそう、ゆうべの残りの炒め野菜とかあ」

「けっこう種類が多いじゃん。あたしなんか、冷いミルクだけだよ」

「あたしだって食欲はないんだよ。お母さんがあ、あんたはわがままでえ、好きなものしか食べないとか言っちゃってえ、無理矢理食べさせるんだもん。でも、ミルクだけっていうのもひどいよお」

「ひどいったって、これでもけっこう、考えてはいるんだよ」

高校の上級か、大学の下級かはよく分りません。とにかくその年頃の女子学生の電車の中での会話です。文字にすれば、当人にもそうと知られるであろう特徴のある会話です。こういう会話はこの人たちだけではない、と思ってみても事の善処には繋がらず、いや、これではいけない、根気よく、と思いなおすにも少々時間がかかります。

面白がってこんな言い方を愉しんでいるうちはまだいいでしょうけれども、これが*生理のリズムになってしまうと、この無意識の快感から抜け出すには、かなりの意志の力を必要とするでしょう。

さきの会話の特徴のうち、一つだけ申しますと、すでにお気づきのように一人は「とか」の多用、もう一人は「けっこう」の多用です。「けっこう」は二度しか使っていませんが、これだけの話し言葉の分量の中で二度はもう、多用です。

「あはれ」一語、「*をかし」一語、それに、前後の言葉との関係でさまざまの表情を与え、*単純ならざる*余韻を生じさせている例は、*王朝の名作をまつまでもありません。つまり、一語の多用にもみごとな例

はあるのです。

「とか」や「けっこう」の多用とどう違うのか。私には、さきの会話の中での使用が、話す人が切実な気持ちから選んだ言葉の運用とは思いい難く、慣れで安易に使われているとしか思われたいのです。

もしも迷いやためらいもあって後の切実な選択なら、その必然性は、それぞれの「とか」や「けっこう」に異なった表情を与えるでしょう。余韻も違うでしょう。ところが実際には、削っても大差ない用い方であり、容易に他の語に置き換えられる、むしろそのほうが効果があるとさえ思われる使い方です。

迷いと選択？ 日常の言葉遣いに、そんな面倒なこと、と言われるかもしれません。もつともです。私は何も大袈裟に言うつもりはありません。ただ、人間の言語生活には、一瞬のうちの*直観的行為となっていくために、そうとも気づかず積み重ねている迷いと選択は多いはずで、この無意識の行為を、時折、突き放して考えてみる必要を申したいのです。

言葉と*おざなりにしか繋がっていない日常生活は、物の考え方、物の感じ方のいい加減さと繋がって不安です。言葉遣いに迷いと選択を。迷いも選択も*徒労とは思いません。迷いも選択もないところに、どうして表現があるでしょう。

(竹西寛子「国語の時間」による)

〔注〕善処——物事をうまく処理すること。

生理——生物が生きていくための体のはたらき。

あはれ——しみじみと心に感じること。

をかし——興味がある。味わいがある。

単純ならざる——単純ではない。

余韻——(言葉や文章などの)心に残るあじわい。

王朝——ここでは平安時代。

直観的^{こっかん}行為 — 物事の姿^{すがた}をすぐにとらえるような行い。
おざなり — まにあわせ。いいかげん。
徒勞 — おだなほねおり。

〔問題一〕

文章Aと文章Bの要旨^{ようし}を、本文の言葉を使って、それぞれ三十
字以内でまとめなさい。（「、」や「。」なども、それぞれ字
数に数えます。）

〔問題二〕

(一) 文章Aと文章Bに共通する考え方を三十五字以内でまとめなさい。
い。（「、」や「。」なども、それぞれ字数として数えます。）

(二) (一)でとらえた考え方をもとに、あなたが日ごろ気になっ
ている言葉づかいについて、自分の体験したことをふまえ、考
えや意見をまとめなさい。ただし、本文の中で使われている例は
のぞくこと。題名・氏名は書かずに、四百字以上、四百六十字
以内で書くこと。（「、」や「。」、段落^{だんらく}をかえたときの残り
のます目なども、それぞれ字数として数えます。）

